『不条理絶頂　ＫＴＩＫあんびりーばぼー』

サンプル版

作者：金目

目次

登場人物紹介
第一話　雨天転倒アナルエクストリーム
（ナマコ型の大人の玩具）

（サンプル掲載はここまでとなります）

（以下、製品版収録）
第二話　風呂上がりは仁王立ちで牛乳ビンビン
（牛乳瓶）
第三話　エアロバイクでエクスタシーバースト
（サドルに生えた極悪ディルド）
第四話　アサルト塞石根　大地のパルスがダイレクトアナル
（地面から飛び出した石の男根）
第五話　デートクラッシュ！　ミラクルテレポーテーション
（ケツの中にテレポーテーションしたナマコ型の玩具）

『不条理絶頂　ＫＴＩＫあんびりーばぼー』は、不条理な状況でケツに嵌められた主人公がケツイきトコロテンをする作品となっております。
各話の下に記載されたものが、主人公である厳俵原菊瓶のケツを責める道具です。
第二話以降も、第一話のような不条理な流れで菊瓶のケツが責められ、菊瓶はケツイきトコロテンをさせられます。

【お願い】
この小説は金目によるフィクションであり、現実に存在する個人・団体などとは無関係です。
無断転載・私的利用の範囲を超えた共有など、著作権法に触れる行為は控えていただきますようお願いします。
この作品は犯罪行為を推奨するものではありません。フィクションとして、お楽しみください。
作中の性行為描写はすべてファンタジーとなります。現実のセックスへの参考になさらないようお願いします。

登場人物

厳俵原　菊瓶（ごんだわら　きっぺい）

24 歳。男。童貞。柔道選手。

喘ぎ声だけ中途半端に高く、実況風になることを気にして、恋人とのセックスに踏み切れない。

急な大雨の日での転倒を境に、訳の分からない状況でのケツイきトコロテンを繰り返す破目になる。

平常時 12.7cm、勃起時 25.7cm、亀頭はずる剥け。勃起角度は 45 度。

第一話　雨天転倒アナルエクストリーム

「参ったな……」

雨に濡れて額に張り付く黒髪を頭頂部に撫で戻しながら、厳俵原菊瓶（ごんだわら　きっぺい）は所属しているグランディフ警備保障独身寮への道を走る。

今朝の天気予報では、今夜遅くから降るはずだった強い雨が正午過ぎに降り出したため、走り込みに出ていた菊瓶は完全に濡れてしまったのだ。

グランディフ警備保障独身寮への帰り道でも、慌てて雨戸を閉める人たちを見たし、今夜遅くからという予報を信じて布団を干したままの家庭もあった。

初夏の陽気に合わせ、白のＴシャツと紺地にスポンサー企業であるグランディフ警備保障のロゴが金で刺繍されたハーフパンツを履いて走り込みに出たのだが、雨に濡れたせいでＴシャツやハーフパンツの下に穿いている白ブリーフが張り付いて動きにくい。

特に、白ブリーフの方は菊瓶の雄魔羅に張り付いてチンポジが悪くなっているし、ハーフパンツの中に手を入れてチンポジを直してもすぐに居心地が悪くなるのだ。

雨に濡れた菊瓶の姿は、日常離れしている。

眼光が鋭いとマスコミや所属する企業の柔道部の仲間たちに評されるだけあり、菊瓶は、眼光の鋭さとがっしりとした四角い顔立ちが独特の存在感を放っている。

無精髭が生えていれば、完璧に野武士か山賊だ。

濡れたＴシャツのみの上半身は、分厚い筋肉に覆われており、人というよりは、熊が人に化けたかのような印象を与える。

というのも、菊瓶の体毛が濃いからだ。

顔は髭が生えていないのに、腕の毛は濃く、白のＴシャツに透けた胸板や腹も剛毛の黒さが透けて見える。

白のＴシャツから透けて見える前面の四割程度が体毛の黒さだろうか。

そして、紺のハーフパンツから覗く脛の毛も濃い。

男性の美容脱毛が奇異の目で見られなくなった現代において、この体毛の濃さはそれだけで衆目を集める。

急な雨に鞄を頭にかざしながら走る女性も、菊瓶の姿を見て驚いた顔をする。

とはいえ、菊瓶はそうした視線に慣れているし、気にも留めていない。

菊瓶は、有名な柔道選手であった泉生が師範を務める道場で中〇二年生の時から柔道に励んできた。

泉生師範は古風で厳格な性格をしており、体毛の手入れなど軟弱なことだと考えている。

泉生師範やその門下生たちは、影響を強く受けており、門下生の一人である菊瓶もまた、体毛の手入れに対し、非常に消極的になった。

今の菊瓶は、若手の柔道選手の中では、国内だけではなく、世界大会での成績も高く、期待の選手の筆頭とも称されている。

とはいえ、菊瓶はそうした期待に浮ついたりはしない。

一戦一戦、死力を尽くし、相手を上回れば、結果がついてくると考えているのだ。

菊瓶は、グランディフ警備保障独身寮への道を走る。
体幹がしっかりしているので、雨に濡れたアスファルトを踏みしめても揺らぐことがないのだ。
そうして、あと三つ角を曲がれば、グランディフ警備保障独身寮が見えるところまで走った。
熱いシャワーを浴びてさっぱりとしたい、と菊瓶は思う。
前方の路地には、粗大ゴミの回収日だったのか、椅子や机、段ボール箱に入ったマッサージ器などが積み上がっている。
この雨では、回収業者も大変だろう、と思いながら菊瓶は走る。
粗大ゴミが置かれた路地を越え、曲がり角に近づく。
そこへ、角を曲がって自転車がこちらに走ってくる。
老婆が右手で傘を差し、左手のみでハンドルを握る片手運転だ。
菊瓶は、ワンステップで飛びのき、自転車の進路から離れる。
だが、自転車が急によろめき、菊瓶の方に曲がってくる。
「危ないぞ！」
菊瓶は叫びながら、慌てて後ろに飛びのく。
流石の菊瓶も足が滑り、尻から倒れこんでしまう。
「すいませーん！」
謝罪をしながらも、片手で自転車を運転する老婆は、そのままふらふらと走り去っていく。
菊瓶の柔道の師であり、人生の師でもある泉生師範が老人の基準になっている菊瓶にしてみれば、あのような浮ついた行動を取る老婆は、非常識な存在だ。
こんな雨の日に尻もちをついたら、紺のハーフパンツどころか、下に着用している白ブリーフまで濡れる、いや、この雨だからもう濡れているか、と考えながら、菊瓶は地面への衝撃に備えた。

ずどおおおおおおおおおおおおおおおおおん！

「ぬおっ！」
菊瓶は尻に野太い声を上げた。
分厚い筋肉を誇る屈強な柔道選手が尻もちをついたにしては、大きすぎる声だ。
菊瓶にとって予想外の衝撃だったのだ。
菊瓶は国内の若手柔道選手の中でも期待株の筆頭だ。
当然、受け身は慣れたものであり、尻からの落下など数える必要がないほど繰り返している。
柔道場の畳とアスファルトの違いを踏まえたうえでも、予想外の衝撃だったのだ。
菊瓶は、アナルがジンジンと痛む。
中〇一年生のときに、水着への着替え中、同級生に人差し指と中指が根本まで入ってしまうほどのカンチョウをされた苦い思い出がある菊瓶なのだが、そのときよりも太くて長いものが入っているとしか思えない。

それに、尻から、雨に濡れたハーフパンツや白ブリーフの感触が消えているのだ。
尻肉に、直に水が、いや、雨水やアスファルトが接地しているとしか思えない。
菊瓶は己の腰から下を見下ろし、訳が分からなかった。
菊瓶はランニングの際、必ず、ハーフパンツの紐をきつく締めている。
ズボン下ろし、パンツ下ろしで初恋以前の淡い思いを壊された経験がそうさせるのだ。

精通が小〇校四年生の夏休み中であり、二次性徴が同級生たちより早く訪れた菊瓶は、色んな意味で同級生たちの中で目立っていた。
身長が伸びるより先に、精通と体毛の増加、チン毛の繁茂と、お〇ん〇んからチンポへの成長が始まったのだ。
小〇校四年生の夏休み前まではありきたりなおちん〇〇だったのに、夏休み明けには平常時で8cm近くにまで成長したのだ。
菊瓶の亀頭の色はもともと暗いピンク色だったのだが、亀頭が丸出しになったことで、同級生たちよりも黒っぽい亀頭の色も露見してしまう。
夏休み明けに同級生の様子が大きく変われば、それだけで注目を集める。
体育の着替えのときに白ブリーフ一枚になると、あるかないかのもっこりをしている同級生たちの中で、一人だけズモモモと盛り上がっているのだ。
好奇心や衝動に歯止めをかけることを学んでいる最中の小〇生男子ともなれば、体毛が生え、一人だけ先におち〇〇んを卒業し、ずる剥け亀頭の色も違う菊瓶は、格好の獲物となる。
ズボン下ろし、パンツ下ろしは日常茶飯事であったし、菊瓶が淡い思いを抱いていた隣のクラスの路子さんにずる剥けでチン毛ボウボウのチンポを見られた際には、悲鳴を上げられ、泣かれてしまった。

そうした苦い思い出から、菊瓶はズボン下ろし、パンツ下ろし対策として、腰の紐をきつく締める習慣をつけた。
だというのに、きつく締めたはずのハーフパンツが雄魔羅の根本ギリギリまで落ちているのだ。
ハーフパンツの上部には菊瓶が愛用している白ブリーフのゴム部分が覗いているし、腹毛からへそを通ってチン毛にまでつながっている体毛も丸見えだ。
チン毛が見えるほどハーフパンツや白ブリーフが脱げた理由も分からないが、アナルから侵入しているモノも抜かないと駄目だ。
菊瓶は手を前につき、腰を浮かそうとした。

ぶいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいん！

「ぬあっ！」
アナルから始まり、下腹部を中から揺さぶる振動に驚いた菊瓶は、再び尻もちをついてしまう。
柔道選手として鍛錬を積んできた菊瓶だが、アナルの鍛錬は柔道には含まれていない。

異物をアナルに挿入されたことは、中〇一年生のときのカンチョウの一件だけだ。
だから、菊瓶はアナルに何かが入る経験など積んでいないし、何でこんなことになっているのかも分からない。
とにかく、抜かなければ、と菊瓶は思うのだが、アナル内部から下腹部を揺さぶる振動が強烈で、腕や足に力を入れても、肝心の腰が持ち上がらないのだ。
「ぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐ」
菊瓶は雨が降る中、路地で尻もちをついたまま、低い声で呻く。
アナルを押し広げられている違和感と疼痛、そして、中から揺さぶられる不快感が菊瓶には耐えがたいのだ。
反対側の角から、真っ赤なレインコートを着用した女性が近づいてくる。
菊瓶は助けを求めようかと思ったが、どう助けを求めればよいのかが分からない。
菊瓶は、泉生の門下生として、泉生の薫陶を強く受けた。
その結果として、菊瓶の価値観は泉生の古風な価値観の影響を強く受けている。
その菊瓶にとって、見知らぬ女性に対し、「ケツに何かが刺さってしまって困っている」などと助けを求めるのは、月を持って帰ってきてほしいという駄々に等しい無理難題なのだ。
菊瓶は、何も言えず、歯を食いしばって俯いている。
真っ赤なレインコートを着た女性は、倒れこんでいる菊瓶をちらっと見ると、目を逸らし、早足で去っていく。
女性の視点ならば、当然の反応だろう。

菊瓶は、熊が人型になったかのような分厚い筋肉と濃い体毛が目立つ男であり、眼光も鋭い。
傍目には怖そうなのだ。
その菊瓶が尻もちをついて歯を食いしばって何かを堪えていて、ハーフパンツと白ブリーフが雄魔羅の根本ギリギリまで下りていて、腹毛からつながったチン毛も丸見えなのだ。
不審者だと判断をするのは当然だろう。

女性に不審者と見なされたことに菊瓶はショックを受ける。
だが、仕方がないことだとも考える。
チン毛が丸見えになるほどズボンを下ろして尻もちをついている男なんて、関わり合いになりたくないと思うのが普通だろう、と考え直したのだ。
「ぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐ」
菊瓶は呻きながらどうにか腰を浮かそうと、腕や足に力を入れる。
だが……

ぐうぉんぐうぉんぐうぉんぐうぉんぐうぉん！

「うぎぎぎぎぎぎぎぎぎぎぎぎぎぎぎぎ！」

菊瓶のアナルに侵入している何かが激しく波打ち始め、その振動のえげつなさとおぞましさで菊瓶は三度目の尻もちをついてしまう。
「あぎゃん！」
尻もちをついた衝撃で菊瓶は悲鳴を上げる。
尻もちをついた拍子にアナルの奥を強く突かれたのだ。
そして、同時に、アナルを割り開かれた感覚が薄れたのを、菊瓶は自覚する。
三度目の尻もちの衝撃で、菊瓶のアナルから侵入している何かが、奥まで入ってしまったのだ。
「ぐううおおおおおおおおおおおおおおおおおお！」
若手柔道選手の期待の星であろうとも、アナルセックスやアナニーの経験どころか、知識さえない菊瓶にとって、ケツの奥で波打つようにナニカに動かれるのは耐え難い気持ち悪さだ。
菊瓶にとって、ケツやアナルとは出すための部位であり、ナニが入るような場所でもなければ、奥をぐうぉんぐうぉんと抉られるような器官でもない。
アナルセックスやアナニーという言葉さえ知らない菊瓶にしてみれば、今の状況は理不尽な拷問でしかないのだ。

助けてくれ！

恥も外聞もなく、菊瓶はそう考える。
菊瓶にしてみれば、身体を中からかき回されている状態なのだ。
異物が身体の中で動いていると考えるだけで、気分が悪くなるし、振動で内臓が揺さぶられているようで違和感が辛い。
泉生師範の薫陶を受け、過去に囚われてはならないという人生哲学を得た菊瓶なのだが、それでも、先ほどの真っ赤なレインコートを着用した女性に助けを求めればよかったと後悔してしまう。
とにかく、次に誰かが来たら助けを求めなければならない。
「ぐぎぎぎぎぎぎぎぎぎぎぎぎぎぎぎぎぎぎ」
菊瓶は、ケツの奥で波打つように蠢動するナニカに呻き声を上げさせられる。
雨は降り続け、菊瓶の全身を濡らし続けている。
菊瓶の腕の毛や脛毛もぐでっと肌に張り付いているし、丸出しになっている下腹部の毛もべちょっと肌に張り付いている。
ぶろろろろと、バイクの音が近づいてくる。
「だ！　だれがっ！」
菊瓶は、ケツの奥で蠢動するナニカに耐えながら声を上げる。
菊瓶から見て右手の方向の角に、近くにある配送ピザチェーン店のバイクが現れる。
だが、バイクは一時停止と左右確認をするものの、菊瓶の声や姿に気がついた様子もなく、そのまま走り去ってしまう。
「ぐぎぎぎぎぎぎぎぎぎぎぎぎぎぎぎぎぎぎ」
菊瓶は、ケツの奥で蠢動するナニカに耐え、くもぐった悲鳴を上げることしかできな

い。
　菊瓶は、どうにかケツの奥に侵入したナニカを取り除こうと試みるが、菊瓶が腰を上げようと腕や足に力を込めても、肝心の腰がなかなか持ち上がらない。
　菊瓶自身にとっては最悪の状況なのだが、傍目には滑稽な見世物だ。
　菊瓶が有名な柔道選手であることを知らない者でも、菊瓶は人並み外れた雄であることは直感的に判断できる。
　筋肉の厚み、体毛の濃さ、鋭い眼光と厳つい顔立ちは、柔道選手としての技量抜きに、雄としての強みに溢れているのだ。
　そんな強靭な雄が、雨に濡れて尻もちをつき、何かを堪えるように呻いているのだ。
　加えて、ハーフパンツは雄魔羅の根本ギリギリまで下りていて、腹毛からつながっているチン毛まで雨に濡れてぺちゃんこだ。
　菊瓶は、ケツの中で蠢動するナニカのせいで、気分が悪いし、違和感と異物感が気持ち悪い。
　とにかく、ケツの中から抜き出したいのに、肝心の腰を浮かせられず、アナルに触れることさえできない。
　雨に濡れた身体はどんどん体温が下がり、菊瓶の体力と気力を削っていく。
　このままでは、不味い……！
　菊瓶は、四肢に渾身の力を入れて立ち上がろうとする。
　顔は、仁王像のような覇気に溢れ、四肢の血管が太く浮かび上がる。
　菊瓶の腰が少しずつ浮き上がる。
　水たまりに落ちていた尻が浮き上がり、その分厚く雄々しい尻肉から雨水を滴らせる。
　ケツの奥で蠢動するナニカが引き起こす不快感と異物感、そして内臓を揺るがすような振動に耐えながら、菊瓶は上半身を前傾させ、膝を伸ばせば立ち上がれるところまで来た。
　菊瓶の額は雨水に混じって脂汗で濡れている。
　菊瓶は膝を伸ばし、雨に濡れたアスファルトから手のひらを放そうとする。
「ぐおおおおおおおおっ」
　だが、手を浮かせたことで姿勢が崩れ、菊瓶はもう一度尻もちをついてしまうし、受け身に失敗して左肘から転げ落ちてしまう。
「ぐはっ！」
　高さはさほどでもないが、肘をぶつければ衝撃が神経を通じて脳を揺さぶるし、ショックも長引く。
　菊瓶は左肘を地面につけたまま、荒い呼吸を繰り返す。
　水たまりに左半身が漬かっている菊瓶の姿は、傍目には酔っ払いか変質者だ。
　呼吸は荒く、ビグンビグンと身体を震わせているし、雄肉でぎっちりと盛り上がったケツだけ丸出しになっているのだ。
「……なあ、なんだこのリモコン」
「なんだろなあ。つまみだけじゃん」
　菊瓶から見て左手の曲がり角に傘を差した男子高校生が二人立っており、一人がピンク色の何かを拾い上げ、手元で眺めている。

　菊瓶は、彼らに助けを求めようとするが、左肘をアスファルトに打ち付けた衝撃が残っているうえ、ケツの奥で蠢動するナニカによる不快感と異物感、内臓への揺さぶりもあり、「助けてくれ」という単純な言葉でさえ、発声できない。
「試しに捻ってみればいいんじゃね？」
「なんか、ヤバそうじゃね？」
「どうせ、壊れたリモコンだよ」
「そりゃそうか。
　でなきゃこんな道路に落ちているわけないもんな」
　そして、男子高校生の一人がピンク色のリモコンのつまみを捻った。

　ぎゅごおおおんぎゅごおおんびぐうううんびぐうううううううん！
　菊瓶のケツの奥で蠢動しているナニカの動きが激しく大胆になる。
　菊瓶には己のケツの中を透視する能力などないが、菊瓶の体感ではケツの奥で水揚げされたばかりの伊勢海老が跳ね回っているかのような衝撃なのだ。

「ぐうごあああああああああああああああああああああああああああああああああああああ！」
　ケツの奥からの激しい振動と衝撃に耐え切れず、菊瓶は手負いの獣のような咆哮を上げる。
「なんだこれ！　やべーリモコンじゃん！」
「誰だよ、壊れてるとか言ったやつ！」
　男子高校生たちがピンク色のリモコンを菊瓶の方に、正確には積み上がっている粗大ゴミの方に向けて放り投げて駆け出した。
「あぎゃああっ！　ぎゃひいいいい！　ごごあああああああああ！」
　菊瓶は全身を激しく震わせながら、野太い声で叫ぶ。
　雨の勢いが強まったことと、周囲の家が雨戸を閉めてさえいなければ、近くに住む誰かが、菊瓶の異変に気がついただろう。

　ケツが壊される！

　菊瓶は本気でそう感じた。
　こんなことが続いたら、ケツがまともに使えなくなると、菊瓶は本気で思っている。
　ケツの奥で暴れ狂うナニカの衝撃に耐えながら、菊瓶はどうにか四つん這いになった。
　菊瓶は、男子高校生たちの会話を耳にしていた。
　だから、理屈は分からないけれど、男子高校生たちが弄っていたリモコンが、ケツに侵入しているナニカと連動していることは悟った。
　だから、菊瓶は雨の勢いが強まり、水たまりが広がるアスファルトで手のひらと膝下を濡らしながらリモコンを探す。
「ぐうううがあああああああああああああああああ！」
　手のひらを少し前に出すだけでも、今の菊瓶には難行だ。
　アナルセックスやアナニーの経験や知識がない菊瓶にとって、ケツに何かを入れられる

ことは恐怖であり、恥辱でしかない。
　加えて、ケツの奥に侵入しているナニカに暴れ狂われていては、若手柔道選手の期待の星である菊瓶であろうとも、耐えられるはずがない。
　菊瓶は、男子高校生たちが投げ捨てたリモコンを探す。
　ケツの奥に侵入しているナニカの正体は分からないが、まずはナニカの暴虐を止めないことにはどうしようもないのだ。
　菊瓶は雨に濡れて額に張り付いた髪をかきあげる余裕もなく、四つん這いになり、雄肉でぎっちりと盛り上がったケツを丸出しにして必死にリモコンを探す。
「ぬぐうっ！」
　菊瓶は背中を丸めて悲鳴を上げた。
　ケツの奥に侵入しているナニカの動きが変わったのではない。
　菊瓶は、ケツの奥で暴れ狂うナニカの動きに精通の思い出を連想した。

　菊瓶の精通は、バランスボールだ。
　菊瓶の父親がバランスボールに腹を乗せてだらだらとしているのを真似していた菊瓶は、バランスを崩して下腹部を擦るように乗せた。
　その時に、こう、今までにない気持ちよさを感じたのだ。
　鈴口がムズムズして漏れそうなことが恐ろしいのに、その果てを知りたくなるようなおかしな感覚だった。
　だから、菊瓶はバランスボールに下腹部を乗せ、お〇〇ちんを着衣越しにバランスボールに擦りつけ、そのまま精通を果たしたのだ。
　当時の小〇四年生には、保健の授業が設定されていなかったため、菊瓶は何かを漏らしたのが気持ちよかったという感覚と、漏らしてしまったことへの恐怖しかなかった。
　菊瓶は、ズボンとパンツ、そして、父親のバランスボールを汚してしまったショックで泣いてしまい、帰宅した父親に精通のことを教えてもらわなければ、病気になったと思い込んだままだったろう。

　精通を連想してしまった菊瓶は、ケツの中を好き勝手にされている現状を、「何かよく分からないけどこのままだとイきそうだ」と感じた。
　アナルセックスやアナニーの経験や知識がない菊瓶は、己の直感に恐怖する。
　柔道師範にして、人生の師である泉生師範の薫陶を強く受け、古臭い男性観に染まりきった菊瓶にとって、男がケツでイくというのは、意味不明の不条理でしかない。
「いやだあああああ……あああああん！」
　菊瓶の悲鳴が中途半端な裏声の喘ぎ声に変わる。
　菊瓶は、ズボン下ろし、パンツ下ろし以外にもう一つコンプレックスがある。
　それは、菊瓶は性的快感で高まってくると中途半端な裏声になるのだ。

　普段は、重々しい低音で発生しているのに、素人がおかまバーのスタッフの真似をしているような、そういう雑な裏声になってしまうのだ。
　小〇四年生の夏休みに精通を終えた菊瓶は、小〇五年生のときには身長が大きく伸び、

声変わりも済んで、今の低音になっている。
　開けっぴろげな気質ではない菊瓶は、オナニーの比べ合いなどしたこともなく、己の喘ぎ声が物笑いの種にされると思い知らされたのは中〇一年のときの林間学校の夜だ。
　同級生たちの中でも下着のもっこりや体毛の濃さで悪目立ちをしていた菊瓶は、クラスカースト上位グループの男子たちに強要されて、オナニーを披露させられた。
　その際に、その中途半端な裏声を徹底的に笑われ、馬鹿にされ、そして、高校・大学進学後も、そのことを広められて陰で笑われてきたのだ。
　だから、菊瓶は、己の喘ぎ声が嫌いだ。
　オナニーをするときは必ずタオルを噛んでいるし、恋人の舞耶とのセックスにも踏み切れない。
　舞耶とのセックスはもちろんしたい。
　だが、タオルを噛んでセックスをする理由や、喘ぎ声を侮蔑されたら、と思うと、菊瓶は舞耶にセックスをしたいと言い出せないのだ。

「やはっ……やあああああああああん」
　菊瓶は中途半端な裏声で喘ぐ。
　菊瓶の股間では、菊瓶の雄魔羅が雨に濡れて肌に張り付く白ブリーフの中で少しずつ勃起し始めている。

　なんでだよ！！！！！！！！！

　菊瓶は混乱し、恐怖する。
　アナルセックスやアナニーの経験や知識がない菊瓶にとって、今の状況は天変地異に等しい異常事態なのだ。
　男なのに、チンポ以外の場所で気持ちよくなっているということが、たまらなく恐ろしいのだ。
　このままでは、ヤバいところまでイってしまう。
　戻れなくなる。
　そう直感した菊瓶は、とにかく、ケツの奥で暴れ狂うナニカを止めなければ、と必死に男子高校生たちが投げ捨てたリモコンを探す。
「あああああああうううううううううううううううううううううん！」
　菊瓶は、中途半端な裏声で喘ぎながら大雨の中、アスファルトを四つん這いになってリモコンを探す。
　菊瓶の股間ではハーフパンツの前が大きく盛り上がっている。
　平常時でもガチムチの菊瓶の雄魔羅だが、勃起するとより太く雄々しい剛直となる。
　白ブリーフの前合わせから飛び出した剛直雄魔羅がハーフパンツの布地をぐぐっと持ち上げているのだ。
　勃起角度が水平からの45度程度であるため、ハーフパンツの盛り上げ方がいやらしく目立ってしまう。
「ああはあああああああああああん♡」

菊瓶は四つん這いでちょっと進むだけで、いやらしく悶える。
ずる剥け亀頭がハーフパンツの裏地に擦れる感触と、ケツの奥で暴れ狂うナニカからの快感で頭がおかしくなりそうなのだ。
「いやらのおおおおおおおおおおおおおおおお♡
ケツはあああああああああああああああああああああひいいいいいいいいん♡」
菊瓶は、快楽に耐え切れずに肘まで地面につけて悶える。
分厚く鍛え上げられた胸板が水たまりすれすれにまで近づき、ピンと勃った乳首が水たまりに濡れている。
「やひいいいいいいいいいいいいいいいいいいいん♡
ああああああうううああああああああああああああああああん♡
ひぎいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいん♡」
菊瓶の今の様子は、かなり不気味であった。
普段の菊瓶は声が低く威厳と威圧感のある益荒男なのだが、その益荒男が、尻を剥き出しにして地面にうずくまり、ハーフパンツの股間を大きく盛り上げて、中途半端な裏声で喘いでいるのだ。
その手の趣味がない者は嫌な顔をするだろうし、幼児に見られたりすればトラウマを与えかねない。
菊瓶は、尻だけ浮かせた匍匐前進のような不細工な姿勢で大雨に濡れるアスファルトを這い回る。
そして、ようやくリモコンを三つ見つけた。
ピンク色のリモコンが二つ、黒い色のリモコンが一つだ。
「やひいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい♡」
リモコンを見つけた安堵の声のはずが、ケツの奥で暴れ狂うナニカによる快感のせいで絶頂したマゾ豚のような声になっている。
菊瓶は、男子高校生たちの会話から、ピンク色のリモコンからつまみしかない方を選ぶ。
道路に捨てられていたリモコンなので、本来あるべき目盛りはオンオフの表記がなく、つまみも中途半端な位置に回されていた。
菊瓶は、このままケツでイきたくない一心で、そのつまみをまず、左端まで回す。
だが、ケツの奥で暴れ狂うナニカの動きに変化はない。
菊瓶は、ピンク色のリモコンのつまみを右端まで回す。
けれど、ケツの奥で暴れ狂うナニカの動きに変化がない。
「いひゅうううううううううううううううううううああああああああああ♡」
菊瓶は、中途半端な裏声で喘ぎ、ケツをぶるんぶるんと震わせる。
最初に選んだリモコンが外れだった失望だけではなく、ケツの奥で暴れ狂うナニカでイかされそうなことへの敗北宣言の先走りでもあった。
「いやらのおおおおおおおおおおおおおおお♡」
ケツでイかされたくない！
その一心で菊瓶は、二つ目のピンク色のリモコンを手に取る。
二つ目のピンク色のリモコンも、表記が剥げているが、オンオフ操作のボタンと上下さ

せるつまみが二つついていた。
　菊瓶は、まず、オンオフ操作のボタンを弄ってみる。
　だが、ケツの奥で暴れ狂うナニカの動きは止まらない。
　上下に動かすつまみも弄ってみるが、ケツの奥で暴れ狂うナニカは、菊瓶をケツでイかせようとする。
「あぎゅうううううううううううううううあああああああああああああああ♡」
　菊瓶は腕の上に額を乗せ、全身を快楽に震わせる。
　このままケツでイかされたい……
　菊瓶の脳裏に悪魔が囁く。
　ケツの快感は、オナニーよりも濃厚で毒のように甘美だと、菊瓶は感じている。
「ひぎゅうううう！」
　だが、菊瓶は顔を上げ、歯を食いしばって首を振る。
　菊瓶は、柔道選手として雄々しくあらねばならない。
　それこそ、菊瓶の師である泉生師範のようになるのだ。
　だから、ケツでイかされることを望んではならないのだ！
　菊瓶は、一瞬だけ、雄々しい柔道選手としての己に立ち返る。
　まだ、黒いリモコンが残っている。
　このリモコンで、菊瓶は助かるはずだ！
　菊瓶は、ケツの快楽に抵抗することに必死で、肝心なことを忘れている。
　男子高校生たちが投げ捨てたのは、ピンク色のリモコンなのだ。
　だから、黒いリモコンを操作しても意味がないのだ。
　黒いリモコンには、四つのボタンがついている。
　つまみはない。
　だが、ケツでイかされたくない一心で、菊瓶は黒いリモコンのボタンを必死に押しまくる。
　けれど、菊瓶のケツの中で暴れ狂うナニカの動きは止まらない。
「あうううううううううううううううううううううううん！
　チンポの奥がぎゅううんぎゅううんしてきたあああああああああああああん♡
　カウパー腺液でションベン道がぬるぬるするうううううううううううううう♡
　ざあめん発射準備くるうううううううううううううううううううう♡
　前立腺がぎゅわんぎゅわあああああああああああああん♡
　ケツいきはいやあああああああああああああああああああああん♡」
　菊瓶が己の剛直雄魔羅の様子を実況し始めた。
　菊瓶の喘ぎ声が嘲笑され、笑い話として広められるもう一つの理由が絶頂間際の実況風の喘ぎ方だ。
　精通をした当初、父親に教えられたものの、菊瓶は、オナニーが不自然な行為なのではないか、という不安が強かった。
　だから、父親がどこかから持ってきた二次性徴の手引きを読みながら、菊瓶の精通は早かっただけであり、異常事態ではないと確認をしながら出ないと、オナニーができなかったのだ。

そして、そうした習慣がいつの間にか、二次性徴の手引きを音読しながらのオナニーとなり、実況風喘ぎ声として身についてしまったのだ。
菊瓶は、己の喘ぎ方から、このままではケツでイかされると確信する。
そんなことは耐えられない。
アナルセックスやアナニーの経験どころか知識すらない菊瓶にとって、ケツイきは、男らしくない変態的絶頂であり、菊瓶の柔道の師であり、人生の師である泉生師範に軽蔑される愚行なのだ。
だから、絶対に、ケツイきしてはならないのだ！
けれど、菊瓶の身体は、ケツの奥で暴れ狂うナニカに屈服させられている。
菊瓶は、尻だけ突き上げた姿勢でビグンビグンと全身を震わせることしかできない。
「ひぎゅうううううううううううううううううううううう♡
金玉ビグンビグンしてえええええええええええええええ♡
前立腺からザーメンがくるうううううううううううううううう♡
ションベン道をせりあがるうううううううううううううううううううううう♡
らめえええええええええええええええええええええええ♡
もどってえええええええええええええええええええええええ♡
ざあめんもどってえええええええええええええええ♡
雄臭ざああめんだしたくないいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい♡
ケツでイくのはらめえええええええええええええええええ♡
ひぎいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい♡
特濃ざああめんにションベン道をこすられるうううううううううううううう♡
ねちっこい雄臭特濃ざあめえええんでえええええええええ♡
ションベン道をざあめええええん♡
ざあめええええええんプレイいいいいいいいいいいいいいいん♡
ざあめえええええええええええん♡　プレイされちゃうううううううううう♡
早熟雄魔羅からあああああああああああああああああああん♡
精通フライングざあめえんがあああああああああああああ♡
精通フライングざああめえええええんがあああああああああああああああ♡
でるうううううううううううううううう♡
ざああめええええんでえええええええええええ♡
ションベン道こすられるうううううううううううううううううううううう♡
ざあめんんんんんんんんんん♡
雄イきするうううううううううううううううううううううう♡」
菊瓶の全身が、感電したかのように大きく震える。
菊瓶のハーフパンツのもっこりも大きく脈動した。

どびゅるるるるるるるるるるるるるるる！

菊瓶のハーフパンツのもっこりからザーメンが勢いよく噴き上がった。
ハーフパンツの布地越しだというのに、生チンポからの射精であるかのような勢いでび

ゅるるるるんと水たまりにザーメンの塊がぼごんぼごんと産み落とされていく。
　雄臭特濃ザーメンと自称するだけあり、菊瓶のザーメンはかなり粘っこい。
　都会の雨は排気ガスを多く含んでいるため、独特の臭いがあるのだが、菊瓶の雄臭特濃ザーメンは、その雨の臭いにも負けずに生臭さを放っている。
　ハーフパンツの盛り上がった布地から菊瓶のザーメンがぬとぬとと水たまりに落ちることもなく、震えている。
「あうううううううううううううううううううううううう♡
　イったあああああああああああああああああああああああああ♡
　雄臭特濃ザーメンでイったあああああああああああああああああああああん♡」
　菊瓶は、剥き出しの雄尻を突き上げただけの姿勢で震えながら絶頂の余韻に震えている。
　絶頂の余韻に身体を震わせるたび、ハーフパンツのもっこりの先端からぶら下がったザーメンがぶるんぶるるんと震えている。
「……んんぅ」
　菊瓶はケツの奥で暴れ狂うナニカの動きが完全に止まったことを感じた。
　動きが止まれば、ナニカは菊瓶をケツイきさせることもなく、ただの異物でしかない。
　菊瓶は、水たまりに手をついて四つん這いになる。
　それから、ケツの奥に居座るナニカの異物感に耐えながらゆっくりと立ち上がった。
　雨は激しく降っており、通行人も誰もいない。
　菊瓶の白いＴシャツは衣類としての意味を成しておらず、ハーフパンツと白ブリーフもたっぷりと含んだ雨水でずり落ちそうになっており、ハーフパンツは菊瓶の剛直雄魔羅で突っ張られているだけであり、白ブリーフは前合わせから飛び出した剛直雄魔羅に引っかかっているだけだ。
　菊瓶は、どうしようか考える。
　ケツの奥に居座るナニカを取り出す、排泄するということは、大雨で人通りが減っているとはいえ、住宅街の道路で力むということだ。
　ケツからナニカを取り出す瞬間を見られる可能性をなくしたいのなら、あと曲がり角を三つ曲がった先にあるグランディフ警備保障独身寮まで戻ればよい。
　ただ、グランディフ警備保障独身寮まで戻れるのは、ケツの奥に居座るナニカの動きが止まっているときだけだ。
　菊瓶には、ケツの奥に居座るナニカが激しく動く条件が分からない。
　だから、もしも、グランディフ警備保障独身寮まで帰る途中に、また、ケツの奥に居座るナニカが暴れ狂いだしたら、菊瓶は再び、ケツでイかされるかもしれない。
　最悪の場合は、グランディフ警備保障独身寮の前でのケツイきだろう。
　寮の寮友たちにそんな姿を見られたら、と思うと菊瓶は恐ろしい。
　……となれば、今、ここで力み、ケツの奥に居座るナニカを排泄するしかない。
　菊瓶は覚悟を決め、和式便器を利用するように、ケツをやや浮かせた形でしゃがみこむ。
　歯を食いしばり、いつものように力むが、力の入れ方が悪いのか、中々出てこない。
　腹を押して排泄の助けにしようにしゃがみこんでいる姿勢だと、上手く腹を押せない。

菊瓶は、少し悩んだ末に、もう一度立ち上がり、近くの石塀に右手をつき、膝を軽く曲げて雄尻を道路に突き出した。
そして、力みながら左手で下腹部をぐいっぐいっと押してみる。

「……ぐうううううううっ」
菊瓶は、腹の奥から何かが動く感触を得た。
このまま力めば、ケツの奥に居座るナニカをひり出せる。
菊瓶の姿はマニアックなフェティシズムの好例と言えるだろう。
熊が人型になったかのような体格と体毛の濃い益荒男が、雨に濡れながら雄尻を突き出し、力んでいるのだ。
「っぐっ……がっ……ぐあっ……」
ケツの奥に居座るナニカが徐々にアナルに近づいていくのを菊瓶は感じる。
このまま力めば出せるはずなのだが、ケツの奥に居座っていたナニカが大きいのか、アナルから出ていく気配がない。
菊瓶は雨に打たれながら、丸出しの雄尻を道路に突き出しつつ、必死にナニカの排泄を試みる。
「……ぉごっ……がっ……はぁ……はぁ……」
じょぼん！
菊瓶のアナルから、ナニカが飛び出し、水たまりの中に大きな音を立てて落ちた。
菊瓶は、石塀から手を放し、道路に落ちたナニカの姿を確認する。

大きさは、大きめのナマコぐらいだ。
色は地色が蛍光ピンクであり、ビー玉程度の大きさの突起が無数についており、突起の色が緑や紫など、けばけばしい色だ。

「嘘だろ……」
菊瓶が想像していたよりも、ナマコのようなモノは大きく、気味の悪い色と形状をしていた。

ずるるるん！

菊瓶は雄魔羅を擦りながら白ブリーフとハーフパンツが落ちた感触に気がついた。
雄魔羅が萎えたため、ハーフパンツへの突っ張りも、白ブリーフへの引っかかりもなくなり、雨水で増した重みで滑り落ちたのだ。
菊瓶のずる剥け亀頭の先端には、雄臭特濃ザーメンがどろっと垂れており、ぶるぶると震えている。
菊瓶は、ふくらはぎの中ほどまで滑り落ちた白ブリーフとハーフパンツを引き上げるためにしゃがみこむ。

ぎゅううわあああんぎゅうわあああんぎゅわあああああん！

じゃぼじゃぼびちゃびちゃ！

ナマコのようなモノが急に激しく振動し、水飛沫を散らし始めた。
「うおっ！」
既にケツから出しているとはいえ、ケツの奥で暴れ狂っていたモノの激しい動きを見た菊瓶は再び尻もちをついてしまう。
ナマコのようなモノの動きは、ブレイクダンス、あるいは、子どもの全力での駄々こねを連想させる暴れ方であった。
とてもではないが、ケツの奥でこんな風に暴れられたなどと、菊瓶は認識したくなかった。
こんな気味の悪いモノでケツの奥を蹂躙され、無様な絶頂射精をしただなんて、菊瓶は確認したくなかった。
アナルセックスやアナニーの経験もなく、そうした言葉自体を知らない菊瓶は、菊瓶の言う無様な絶頂射精が「トコロテン」と呼ばれていることを知らない。
菊瓶は、さっさとグランディフ警備保障独身寮に帰ろうと決めた。
熱いシャワーを浴びて、こんな忌々しい事故のことをさっさと忘れてしまおう。
菊瓶は立ち上がり、駆け出そうとして足元にハーフパンツと白ブリーフが引っかかっていることを思い出す。
激しく水飛沫を散らすナマコのようなモノを見ないように、目を閉じ、雨水をたっぷり含んで重くなったハーフパンツと白ブリーフを引き上げる。
膝下までハーフパンツと白ブリーフを引き上げたとき、強雨の勢いで、菊瓶の雄魔羅からぶら下がっていた雄臭特濃ザーメンがべどっと白ブリーフの中に落ちた。
菊瓶は雄臭特濃ザーメンが内側に付着した白ブリーフを着用すれば、己の玉袋の付け根あたりに雄臭特濃ザーメンがついてしまうのは嫌だ、と感じる。
けれど、いくら大雨で人通りが減っているとはいえ、雄魔羅をぶらぶらさせてグランディフ警備保障独身寮に帰寮する方が問題だろう。
帰寮後にシャワーを浴びれば済む問題でもある。
どうにかハーフパンツなどを腰まで引き上げた菊瓶は、ずり落ちないように紐を締めなおそうとして、肝心の紐やゴムが切れていることに気がついた。
雨水をたっぷりと含んでいるうえに、雨の勢いも強いので、普通に穿いていては、またずり落ちるだろう。
とにかく、激しく暴れ狂うナマコのようなモノから離れたい一心で、菊瓶は、雄魔羅がきちんと隠れるように、ハーフパンツと白ブリーフのゴム部分を、へその近くで握りしめ、前屈みになって小走りを始めた。
菊瓶は気がついていない。
ゴムと紐が切れたハーフパンツは、大雨のせいでたっぷりと雨水を含み、重くなっている。
だから、菊瓶の雄肉でぎっちりと盛り上がった雄尻が半分程度丸見えになったままだということに、菊瓶は気がついていないのだ。

奥付

『不条理絶頂　ＫＴＩＫあんびりーばぼー』のサンプル

初出：2024年8月26日
作者：金目

金目の同人活動一覧

【pixiv】
https://www.pixiv.net/member.php?id=22137005

【DLsite がるまに】
https://www.dlsite.com/bl/circle/profile/=/maker_id/RG01002299.html

【ゲイ小説進捗状況呟きアカウント】
https://twitter.com/chigaya_deep